第34号　35円
昭和49年5月25日

内容

わが国の大学における
国際交流の諸問題……1
理事会……2
学習院大学協力会員校に……2
千人会の報告……3
第65回大学共同セミナー……4
第9回大学教員懇談会……4
第66回大学共同セミナー……5
寄付金報告……6
業務通信・利用状況……6

セミナー・ハウス
SEMINAR HOUSE NEWS

発行
財団法人 大学セミナー・ハウス
≪所在地≫
東京都八王子市下柚木
（〒192-03）
電話 0426-76-8511～3
≪東京事務所≫
東京都中央区日本橋本町3－3
三井銀行本町支店ビル5階
電話 東京（241）3961
振替口座 東京74590番
編集・発行人 飯田宗一郎
製作 中央公論事業出版

わが国の大学における国際交流の諸問題

留学生問題
——われわれに課せられた国際人への試練——

日本国際教育協会理事長
小川 芳男

大学とは、本来、国際的なものである。日本人だけの教員と日本人だけの学生がいるということは、外国の大学と比べてもっとも異様に感じられる点である。国籍のいかんにかかわらず、優れた学者を呼び、そこを目指して外国から学生が集まるようでなければならない。

日本の留学生問題の根本は、終始一貫して日本の甘い態度にある。国費留学生の選考にしても、大学の意向に関係なく形だけの試験で受入れる。中心であるべき日本語は参考程度というのが現実である。しかも、たった一年の日本語教育で大学に送り出す。これは抜本的に直さなければどうにもならない問題である。

日本人には相手の身になって考えるというSympathetic understandingができない。留学生の指導に対してひじょうに熱心な先生方の中にも、上から詰め込むことが教育の根本であるという姿勢から抜け出ないで、それが精神面にまで及ぼうとしていることがあったり、あるいは外国から来ているのだからと必要以上に甘やかす人がある。過剰な親切、欧米人に対して抱く劣等感とその裏返しの東南アジアの人や黒人に対する優越感等々を克服していくことが、われわれ日本人が国際人として生きていく上に必要なことである。

哲学なき国民

パリ大学大学都市
前日本館館長
相良 惟一

フランスの大学都市とは単に学生の宿泊施設であるのみならず、学生が市民であるところの一つの都市である。パリ大学（一九六八年の紛争を契機に一三の系列による大学に分かれたが、これらを総称していう）だけでも四、五の大学都市を持っている。その一つは国際大学都市と呼ばれ三四の外国館がある。約六千人の学生がここに住み、その半数は外国人学生である。日本館には日本人学生八〇人の約半数がおり、八〇人定員のうち残りの四〇人の国籍は一四、五ヵ国に及んでいる。運営は三四館の館長で構成されている館長会議で行なわれる。病院をはじめ、図書館、食堂などの施設が完備しており費用も安い。

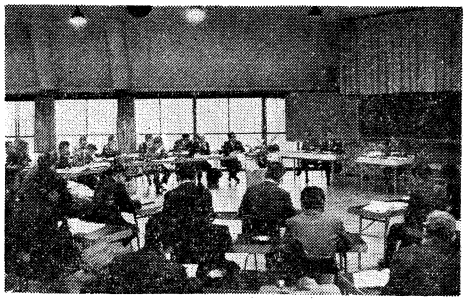
大学問題は、大学が大都会に集中し、それに対応して学生の住居問題を考えなければならない今日では、ある意味で一つの都市問題でもある。フランスは割合に早くこの問題を解決したといえよう。

フランスで学んでいる日本人学生は、国費留学生を含めて一言でいうなら、フランスで勉強する十分な心構えなくして来ている者がほとんどである。私費留学生については全くフランス語の知識を持たないまま来る者が大部分だといってよい。絵を勉強するようなかたちで漠然とパリに来る。中には盗みを働くこともあったり、品行の悪さは目に余ることが多い。

日本の商社の進出はパリにおいても目ざましく、デパートや日本料理店はあたかも軒を並べるような具合であるが、このようなことはけっしてフランス人に良い印象を与えていない。われわれ日本人にとって耳の痛い言葉は、「哲学なき国民」「宗教を持たない国民」ということである。日本人留学生がノートルダム寺院のミサの最中に一杯機嫌でやって来て彼らのひんしゅくを買ったこともある。カソリックを知らずしてフランスを理解できないといわれる程その影響は大きいが、学生に限らず日本の学者の中にも、そのことへの認識のない者が多い。

外国で勉強や研究をする時に、その国にある価値観や概念についての理解なくて来ることはエチケットにも反するし、留学の意味も失われる。短期間でもよいから一定のオリエンテーションを受けて来てほしい、これが私が日本人留学生に願ったことであった。

（第9回大学教員懇談会より。文責編集者）



第9回大学教員懇談会

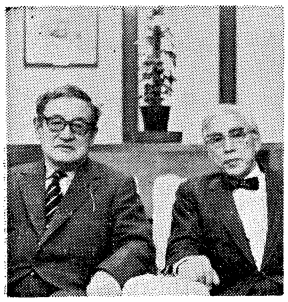
正田建次郎氏（武蔵大学学長）を 後任の理事長に推挙する

加藤六美氏任務完了して交替

昭和49年2月15日
理事会決定

昭和47年4月1日、本法人理事長に就任された加藤六美氏は、昭和48年10月23日付をもって東京工業大学学長を退官されたため、それを機会に理事長辞任の意向を申し出られたので、昭和48年12月17日開催の理事会はその申出を受理し、後任理事長の人選方を茅、大浜、上代三終身理事に依嘱された。

昭和49年2月15日開催の理事会において、茅誠司理事は選考結果の報告を行い、会員校の武蔵大学学長であり、現常務理事でもある正田建次郎氏を最適任者として推挙され、理事会は全員一致の賛成をもって同氏を理事長に選出した。正田理事から、長老三先生の懇請と推挙に対し辞退もだしがたく受諾することにしたとのご挨拶があり、全員その承諾に対し感謝を表わし、ここに決定した。


正田建次郎氏（左）と加藤六美氏

なお約二年の理事長在任中のご苦労とご功績に対しては、理事会を代表して、茅理事から加藤六美氏に深甚の感謝が述べられ、同氏からも短い理事長在任中の有意義な経験を述べて大学セミナー・ハウスへの関心を今後もつづけたいというお別れの挨拶があった。

理事会終了後、新旧理事長を中心にして晩餐会を持ち、一夕の歓をつくして閉会。

新たに四氏を 評議員に委嘱

加藤六美氏
前理事長
日本私立大学連盟会長　佐藤　朔氏
前東京工業大学教授　内藤　正氏
国際基督教大学教授　三宅　彰氏

右四氏ともそれぞれ関係の深い方である。加藤、佐藤、三宅の三氏は、ある時には所属大学の学長として会員校の代表者であられたし、内藤正教授は、東工大のゼミの学生とともにセミナー・ハウスを何回となく利用され、有力な支持者である。式典などの諸行事にも、千人会の名簿にもよく見なれたお名前である。

学習院大学が40番目の協力会員校に

連帯感で結ばれた仲間加わる

昭和49年度早々、学習院大学が協力会員校に入会されたことは、大きな喜びである。昭和49年4月17日開催の理事会は、その加入を承認して歓迎の意を表した。

前学長近藤正夫氏も入会の希望を持っておられ、交際を持っていたわけであるから、時が熟して、新学長児玉幸多氏によって連帯の契約が成立したのである。第四〇番というのも慶祝の数字である。

学習院大学には、セミナー・ハウスを利用される先生方や学生も多く、これを機会に利用者はいっそう増加するであろう。

また当セミナー・ハウスが企画する共同セミナーには児玉久雄、江沢洋教授のごとく、指導教授として協力される先生がおられ、わけても英文学の児玉久雄教授は、昭和45年5月10日の「かやばし」落成の祝いには、同大学の学生によるシェイクスピアのハムレットを、さらに昨年12月1日の野外集会場のオープンには、再び同大学の学生を指導されて、ロミオとジュリエットを新装の野外ステージで上演されるについて多大の援助をして下さった。児玉先生は、このセミナーの丘をのぼられる数多くの先生方のお一人として永く記憶される連帯の友である。

放射線

多摩丘陵の春

中央線八王子駅からバスで十五分、野猿峠の停留所で降りて街道を右に折れると、雑木林にかこまれた丘の上の変わった建物がすぐ目にはいる。コンクリート打ち放し、くさび型、四層の家は、地面のなかに土台を深く打ち込んでいるようにみえる。両手を空にむけていっぱいにひろげているようにみえる。その簡素で堅固な造りはまるで戦士のとりでのようだ。

坂道をゆっくり上がって五分、これが大学セミナー・ハウスの本館である。小庭園を上がったところに講堂と図書館が建っている。なだらかに起伏して南西にひろがった七万八千六百平方㍍の敷地に百戸のユニット・ハウスが七つのブロックにわかれて点在する。これが学生の泊まるところ。各戸に二人分のベッド、机、電気スタンド、ロッカーがある。ブロックごとに別棟のセミナー室があり、ほかに中央セミナー館、教師館、長期研修館、ステージと林間のベンチからなる野外集会場、テニスコートなどがある。

新宿から一時間ちょっとのところにこういう別天地があるとは思いもよらなかった。二十数人の学生といっしょに春休みの二日間をすごした。沈丁花のにおいが流れる多摩丘陵の空気はあまく、丹沢の山なみは美しかった。

だが、自然の環境以上に私が心を打たれたのは、一人あるいは数人の想像力と情熱がやがておおぜいの人の共感をよびおこして協力の輪がひろがり、それが一つの事業を結実させてゆく実例がここにもあるということだった。

大学間の垣根をとりはらった学生や教職員の自由な交流をめざすというこのセミナー・ハウス（英語の名前は「インターユニバシティ・セミナー・ハウス」である）の生みの親は、長く私学の仕事をされて、いまはここの専務理事の飯田宗一郎氏だときく。同氏の夢と何人かの大学人、実業人の協力によって一九六二年に財団法人設立、それから三年余りで開館となった。

開館からかぞえて今年で九歳、この事業が利用者みんなにだいじに育てられてきたことは植樹の立て札を読みながら、なかを一巡するだけでわかる。施設の経営だけでなく、「大学共同セミナー」のこころみも六十五回をかぞえたという。国際セミナーもやっている。

朝、小鳥のさえずりにめざめながら「（心の）うちより出でたる新事業は常に健全にして常に永続す」（内村鑑三）という言葉が実証されつつあることがうれしかった。

（山本満＝亨修大教授）

「東京新聞」昭和49年3月29日夕刊より

さらに輪広がる
千人会の報告

会　員　851名
大学人　664名
社会人　187名

（第23回）
昭和49年3月末現在

▼お礼のことば▲

千人会の名簿を訂正したいので、皆様に近況を問い合わせましたところ、おことばを添えてご動静をお知らせいただき有難うございました。ご関心をお寄せ下され激励までいただき、皆様のお声を直接きくような感じをしました。またうれしいこと、よろこばしいことなどをお知らせ下され、ああそうだったのかと後のまつりになって失礼してしまったのもあります。あるいは悲しいお知らせに接して、心からご同情申し上げていることもあります。ああそれではと早速お見舞の手紙を差し上げておりますが、何分耳にはいることがおくれたりして失礼いたしています。

千人会はセミナー・ハウスの性格を特徴づける連帯組織です。広い社会の中でセミナー・ハウスの活動を証ししたいために支持者を募っているわけです。

▼新しく会員となられた方々▲

A　聖心女子大学学長　相良惟一殿
C　中央大学教授　須藤秀治殿
C　立教大学教授　立入広太郎殿
C　横浜国立大学助教授　子安宣邦殿
C　東京女子大職員　石田孝夫殿

▼会費ありがとうございます▲

昭和49年1～3月（敬称略）

根岸愛子、飯田宗一郎、原　増司、池田貞雄、斎藤恵彦、大橋万知江、石田龍次郎、升本喜兵衛、川本茂雄、一番ヶ瀬康子、薄衣佐吉、松原与三松、川喜田愛郎、有賀喜左ヱ門、上谷琢之、飯尾右一、岩佐凱実、赤松秀雄、中尾信之、久松潜一、田中弥寿雄、半谷高久、園田義道、大川章哉、武田昌輔、後藤聰一、松原元一、中山知雄、磯野　修、関口　晃、松元三郎、福原満洲雄、吉田修三、手岡　勇、吉川春寿、谷口　修、谷　資信、矢野　正、上田明子、山田圭一、水野悦子、佐々木彰、武村次郎、斉藤耕二、光延明洋、守永誠治、江野沢一嘉、T・I、師岡孝次、高木亀一、渡辺忠胤、村上　真、森山俊雄、石塚司農夫、高橋源次、深沢　実、村上泰治、大原恭子、若林貞雄、増地昭男、磯村英一、新井　明、武藤義夫、関　嘉彦、富沢賢治、乾　崇夫、春日井　薫、良知　力、小山弘志、飯泉　信、公文俊平、柳沢冨雄、清水畏三、熊田達子、新保清子、金子ハルオ、鐘ヶ江信光、新澤雄一、海老沢克之、荒川孝子、増澤利幸、藤永鉄雄、近藤圭一、西川大二郎、吉阪隆正、中川　章、佐藤直子、松田正一、目黒謙次郎、T・W、板橋並治、松本武子、吉田公保、正田建次郎、久保亮五、井原恵治、小林忠義、木村増三、小泉　明、稲毛　卓、樫崎彰男、力石誠之介、中岡二郎、最上武雄、田内幸一、須賀恭一、島田依史子、久世寛信、尾田幸雄、村井孝子、平木典子、内山　力、京極純一、一丸節夫、加倉井茂樹、脇田良一、蓮見音彦、山崎俊雄、今井清一、伊藤　学、小林　望、松島千代野、越智　昇、斎藤　勇、中村孝之、三宅義夫、泰本　融、遠藤平治、中村妙子、堀米庸三、佐藤頌子、三浦忠夫、平沢　薫、五唐　勝、笹山忠夫、永井道雄、遠藤卓夫、朝永振一郎、大塚正夫、瀬在良男、伊藤　満、村松林太郎、杉山逸男、田中久兵衛、安藤英治、寿円秀夫、土居建郎、石坂　巌、伊藤卓爾、小山五郎、安斎　伸、向坊　隆、加藤六美、岡村總吾、近藤薫樹、大田未穂、丸山真男、守屋美賀雄、三上次男、菊地昌典、岸　英朗、若林玄修、石原忠男、昌谷春海、磯直道、一松　信、村上千賀子、村井　実、大西　清、永野　賢、須藤秀治、斎藤幸一郎、吉田　裕、山口俊夫、松尾　弘、村田　全、山澤逸平、土井恵美子、斎藤恵彦、内山正熊、井村君江、西　勝、鵜川　馨、護　雅夫、竹田政民、高瀬文志郎、浅野弥祐、手塚喬介、早坂泰次郎、立入広太郎、芳山邦弘、西村閑也、中島直忠、栗原俊記、関根隆光、寺内礼治郎、本間　仁

寄贈図書
昭和48年10月～49年3月

▼お礼―図書を寄贈された方に

多年の研究によるご著書などをご寄贈いただきましたときは、心から出版をお祝いして受領いたします。ご関係なさっている全集、叢書などを出版社におたのみ下され寄贈の仲介をしていただくご好意には深く感謝をいたしています。

小さい図書室ですが、心のこもった本棚です。二人または三人と学生が静かに読書している姿は、多摩の丘をさらに静かにしてくれます。図書の香りをこの丘の若葉の中に風がさそいます。

寄贈者のご厚情に深く謝して。

「町田市史史料集」第8、9集　町田市史編纂委員会殿
「量子力学と観測の問題」　江沢　洋殿
「研究紀要」第2号　東京都立第二商業高等学校殿
「現代中国と国際関係」　中嶋嶺雄殿
「社会学論叢」58、59号「日本大学研究室報」　笠原正成殿
「生産研究所報」27号「生産研究所紀要」第5号　早稲田大学生産研究所殿
「Zenith」　依田　茂殿
「早稲田フォーラム」3号　早稲田大学総長室広報課殿
「現代法と国際社会」「憲法と条約」「日本の領土」「国際組織法」「国際司法裁判所」「国際法概論」　高野雄一殿
「Energy」37号「庖丁文化論」　エッソ・スタンダード広報課殿
「はちおうじの教育統計」　八王子市教育委員会殿
「近代イギリス・アメリカの形成」　亀山　潔ゼミ殿
「政治経済史学」95　彦由一太殿
「自然てなんだろう」近藤薫樹殿
「生涯教育の研究」　室　俊司殿
「現代外交の分析」　坂野正高殿
「私、海が好きじゃない」　吉阪隆正殿
「国際感覚の構造」　金山宣夫殿
「工学院大学研究報告」34、35号「第十六回工学院大学研究発表講演会要旨」　工学院大学図書館殿
「世界の名著」第44巻　中央公論社殿
「日本の経済外交」「革新的対外政策の構想」　山本　満殿

第65回大学共同セミナー

大きな反響を集めて

主題◇人間と言語
期日◇昭和49年2月15～17日

《全体講義》
人間における言語の役割
慶応義塾大学教授　沢田允茂氏

《セクション演習》
A　言語生活の変容
—言語の社会調査から—
国立国語研究所第一研究部長
野元菊雄氏

B　文学と言語作用
東京大学助教授　由良君美氏

C　言語と発想法・論理
早稲田大学講師　小笠原林樹氏

D　ことばと文化
慶応義塾大学教授　鈴木孝夫氏

《ゲスト講演》
シンジュク、シンシュク、アラジュク、ニイジュク
慶応義塾大学教授
池田弥三郎氏

《運営委員》
日本女子大学教授
徳末安伊子氏

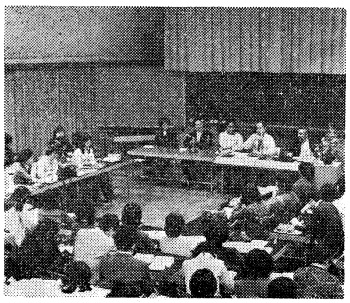
《参加学生》
一〇二名（うち女子七〇名）
日女大(14)、津田塾大(12)、青学大(11)、慶大(9)、東女大(9)、早大(5)、ICU(5)、東大(3)日大(3)、東洋大(3)、上智大(3)、共立女大(3)、工学院大(3)、中大(2)、立大(2)、東京医科歯科大、東教大、お茶の水女大、東工大、埼玉大、都立大、横浜市大、成蹊大、理科大、明学大、学習院大、聖心女大、東海大、鶴見大、関東学院大（各1）
（30大学）

◇

このセミナーの企画には、鈴木、徳末両先生が当たられ、最近とみに関心の高まっている「言語」の問題について、言語学をはじめ哲学、民俗学などの各分野から指導教授を迎えて行われた。

まず、沢田先生は、哲学・思想と言語の関連性を講義され、ついで池田先生は、地名を一つの手がかりに、日本人とことばの民俗学的考察をされた。各セクション間のコミュニケーションをはかるため、共通セッション、パネルディスカッションを組み入れるなどの工夫がなされた。

今回は、関心の深さを反映して応募者一六〇名を数え、当事者はうれしい悲鳴をあげることとなった。やむをえず、三、四年生を優先して参加者を選考したが、今回参加できなかった学生のためには、今年10月にほぼ同じ顔ぶれの先生で行われることになった。このセミナーは学生の学問的関心がけっして衰えていないことを見直させるセミナーでもあった。


パネルディスカッション風景

第9回大学教員懇談会

主題◇わが国の大学における国際交流の諸問題
期日◇昭和49年2月5～6日

国際交流がとみに注目され話題にのぼる昨今であるが、日本の大学は留学生の受入れは勿論、外国大学への留学手続においても甚しく未熟である。制度的にも施設、機関の面からも、新しい時代に対応する体制づくりを開始することは緊要である。

今回は交流の焦点を学生の問題にしぼり、第一日は国の立場から文部省留学生課長・植木浩氏、民間の立場から日本国際教育協会理事長・小川芳男氏の発題をいただいた。植木氏は世界的にみた留学生交流の構造と日本の位置について、具体的な統計数字を引用して説明された。日本は他の主要先進諸国と比べて海外送出し留学生が受入れ留学生より多い「出超型」であり、留学先の地域別パターンを見ると北米、ヨーロッパへの志向性が圧倒的に強く、受入れ留学生についてはアジア諸国からの留学生が全体の八割を占める単一・集中型であり、国際交流といっても現実にはすれ違いの交流でしかない実情が明らかになった。

ゲスト講演にはパリ大学大学都市日本館の館長をしておられ、最近帰国された相良惟一氏にフランスの受入れ体制のご紹介をいただき（小川、相良両氏の講演要旨は1頁参照）、次いでシンポジウムには上智、早稲田、東京の代表的な大学における留学生の受入れ、送出しに関する具体的な紹介と問題点の提示が行われた。

二日目には前日に論議された問題点をしぼり、(A)送出し、(B)受入れ、(C)施設の三分団に分かれ討議を行い、全体会にはそれぞれの分団から具体的な提案が出された。

二日にわたる討議を通じて、わが国における学生の国際交流の問題点がほとんど出しつくされ、最終の全体討議では国際学生交流を推進させるため、国際学生ハウスなどの諸施設を建設することをはじめ、各般の問題を取り上げて国と社会に提言する常置委員会のごとき制度を設けることの必要が確認された。もし、このような活動を開始することになれば、今回の懇談会は大きな収穫を得たわけである。（詳しい内容は、当懇談会記録が発行されているので、これを参照されたい。一部五百円）

◈プログラム

《発題講演》
文部省留学生課長　植木　浩氏
日本国際教育協会理事長
小川芳男氏

《ゲスト講演》
前パリ大学大学都市日本館館長
相良惟一氏

《シンポジウム》
上智大学副学長　山本襄治氏
早稲田大学外事課長
山代　将氏
東京大学学生課長補佐
宮川　清氏

《分団討議・全体会議》

《参加者》61名
早大(7)、上智大(4)、東大(3)学芸大(3)、農工大(3)、電通大(2)、東工大(2)、日大(2)、東経大(2)、専修大(2)、津田塾大(2)、中大(2)、武工大(2)、理科大(2)、東女大(2)、ICU(2)、明大(2)、法大(2)、国教研(2)、東京医歯大、水産大、立大、成蹊大、武蔵大、日女大、東洋大、東教大、東京高専、文部省（各1）、その他3

第66回大学共同セミナー

初めての試み―リユニオン・セミナー

主題◇現代を考える
期日◇昭和49年3月11～13日

≪全体講義≫
現代に生きる
早稲田大学教授　樫山欽四郎氏
これからのアジアと日本
一橋大学名誉教授　板垣與一氏

≪セクション演習≫
A　異文化間コミュニケーション
―心理と表現―
国際基督教大学教授　星野　命氏
国際基督教大学助教授　阿久津喜弘氏
B　都市問題と都市計画
早稲田大学助教授　戸沼幸市氏
早稲田大学講師　寺門征男氏
C　現代のインフレーション
法政大学教授　西村閑也氏
D　国際連合の将来像
東京大学教授　高野雄一氏
東京外国語大学助教授　斎藤恵彦氏

≪運営委員長≫
早稲田大学教授　川原栄峰氏

≪参加学生≫56名（うち女子26名）
早大(8)、津田塾大(6)、成蹊大(4)、学芸大(4)、立大(3)、日大(3)、中大(2)、東洋大(2)、慶大(2)、鶴見大(2)、学習院大(2)、東外大(2)、東大(2)、明学大、法大、青学大、ICU、上智大、相模工大、関東学院大、神奈川大、独協大、埼玉大、岐阜薬大、横浜国大、横浜市大、都立大（各1）27大学

再会の丘で一なごやかな参加者の顔ぶれ

◇

今回は、今年（48年）度開催された共同セミナーでお馴染みの諸先生と学生が参加し、リユニオン・セミナーと銘打って行われたが、アンケート結果を見ると、「学問的関心とリユニオン（再会）の期待から参加」し、その期待が「満たされた」と答えた学生が多く、「これからも毎年行ってほしい」との希望が述べられていた。

「セミナー・ハウス」「共同セミナー」については、学生たちから「個々の大学や専攻分野の枠を超えた内容が与えられ、その形式が真摯で自由な討論の場を与えており、今日の日本の大学教育の欠陥を補う役割を果たしている」という感想が多く寄せられている。

最終日の送別パーティでは、長老教授の板垣與一先生と、この二年間、共同セミナー委員会の委員長をつとめられた川原栄峰早大教授に感謝の花束が学生から贈呈された。お礼に立った板垣先生は、セミナー・ハウスに対する深い愛情を述べられ、また川原先生は過去八年にわたった数多くの思い出と、これからもこのハウスを支援されるという友情のことばを述べられた。飯田専務理事は、はじめて試みたリユニオン・セミナーが成功裡に終ったことを感謝し、この丘で学んだ学生がセミナー・ハウスを第二の母校として永く心の絆を結ばれるよう要望した。

ごくろうさまでした川原栄峰先生

私の大学生活とセミナー・ハウス

卒業にあたって

【1】……伊集院むつみ

大学では入学式のなかった私にとって、第24回新入生歓迎セミナーが大学生としての自分を自覚した本当の意味の入学式であり、そして第66回共同セミナーが卒業式となりました。

私の参加した共同セミナーはわずかこの二回ですが、そこで受けた鮮烈な印象は自分の大学での五年間と匹敵する比重をもっていることを否定できません。

純粋に学問的な興味から、大学、専攻、学年の区別を完全に乗り越えた出会いの地平が拓かれていることを知りえた私の大学生活は、実に豊かなふくらみをもって今その幕をおろしたばかりです。

学ぶことの厳しさと楽しさを、語ることの難しさと喜びとを多摩丘陵の自然のふところで教え込まれた気がします。朝の光の中で、夕映えの中で、夜のしじまの中で、快い疲労感と共にそれはあたかもセミナー・ハウス本館の楔型のように心に打ち込まれています。

これからの長い道程においても、そこから何か暖かいものが注ぎ込まれる、そんな楔型でした。

（国際基督教大学人文学科卒）

【2】……福田　雄

大学共同セミナーのすばらしさは言葉に表わしきれないところがある。

四年生になってはじめて参加したのだが、それまで伸び切ったゴム紐のような学生生活を送ってきた僕にとって、セミナーでの体験は非常に大きいものであった。先生方の講義や参加者との討論を通じて、それまでの勉強の成果を確認することができ、その後の手がかりをつかむこともできた。比較的問題意識の薄いテーマのセミナーに参加したこともあったが、参加すること自体が大きな動機づけになり、新しい分野への関心が生まれてきた。書物を通してしか知らなかった著名な先生方との身近な触れ合いと、新しい友人との出会いを与えてくれた二泊三日のセミナーは、新しい知識の獲得と人間的な成長が同時に実現されるように思われる。大学セミナー・ハウスにはおそらくどこの大学にもない何かがある。現在の大学教育をのり越えているのであり、学生のための開かれた空間なのである。二泊三日のセミナーは大学の講義のいくつに匹敵するだろうか。

（神奈川大学経済学部卒）

業務通信

前号でお知らせした暫定料金に一般社会人、非会員校の理解あるご協力で、利用者増という結果をみました。このことは心苦しい料金値上げに、わずかの救いでした。4月から新しい料金になります。物価の現状をご了察下され、ご協力を切にお願いします。

＊

1月は5日に新年仕事始め。新しい年の第一陣は日本国際学生連合のグループという国際化時代の年の幕あけにふさわしいものであった。1月12日少し早い成人式のお祝いをした。この日この丘を訪れていた横浜国大の学生と共同セミナーの参加学生の中から今年成人式を迎える二〇人のために夕食時に交歓会を催し、彼らの前途を祝福した。

ひなまつり交歓会—EILグループ

2月になると利用者が急激にふえるが、半数は社会人の団体なので、学生を迎える当ハウスにとっては少々もの足りない月である。その中で宮城教育大の井手先生(千人会員)が美術部の学生を引率され、はるばる仙台から訪れて下さったのは、「友あり。遠方より来たる。亦楽しからずや」の観あり。その労を謝してラウンジでお茶の会を催した。

3月は語学関係の団体が多かった。EIL日本語研修、AFS日本協会、日本、韓国、シンガポール、フィリピンのクリスチャン国際ナビゲータ、日本女子大英文科のシェイクスピアドラマゼミ等である。特にEILの方がみえた時は、おひなまつりのお祝いをし、日本の情趣の一片を楽しんでいただいた。21、22日は東大学生俳句会の学生が有馬朗人先生、小佐田哲男先生とともに訪れた。野趣あふれるセミナー・ハウスの丘で詠じた名句をひろってみたい。

春鐘のたゆたひながら山を越え　清田　寿一

石地蔵沈丁が香に手を合わす　吉田　恵一

いぬふぐり地にちりばめてわれらの宿　小佐田哲男

＊

例年になくきびしかった寒さもようやく過ぎ去り、この多摩の丘の植物にとって、「我が世の春」のごとき季節の到来である。フレッシュマンの登場が待ち遠しい。

寄付金報告

(昭和48年10～12月)

ご支援を感謝して拝受いたしました。

【寄付者ご芳名】

10,000円　日本実践経営学会　名東孝二殿
3,000円　サンエスクリーナー殿
10,000円　仲野電機社長　千野熊男殿
5,000円　右田病院長　松本樺太殿
10,000円　中央大学管財部長　充茂甲子男殿
2,000円　西小学校長　池谷英市殿
1,000円　佐藤幹雄殿
10,000円　順天堂大学殿
5,000円　三多摩燃料殿
10,000円　村越造園殿
10,000円　立教大学殿
3,000円　明治大学　祖父江ゼミナール殿
10,000円　日本電信電話武蔵野研究所殿
900円　成蹊大学　佐藤ゼミ殿

【植樹基金】

5,000円　コルゲート大学殿
7,260円　第3回国際学生セミナー殿
10,000円　フジタ工業株式会社殿
2,000円　パキスタン・クエタ大学
S・M・シャー殿
7,940円　(人間・企業・消費)大学共同セミナー殿
6,000円　第62回大学共同セミナー殿
1,000円　早川先生出版記念会殿
100,000円　早稲田大学教授　染谷恭次郎殿
2,767円　第63回大学共同セミナー殿

利用状況

◈1月

日本国際学生連合　井上　孝
東京大学教授　小林　徹
東京高島屋　高橋　昭三
立教大学教授　高窪　利一
東京神学大学第5回教職セミナー
中央大学教授　駒沢大学電気美術研究部
早稲田大学助教授　正岡　寛司
武蔵工業大学教授　西野　忠
一橋大学助教授　福居　純
第64回大学共同セミナー
早稲田大学教授　渋谷　隆一
茨城県立結城第一高等学校
東京女子大学教授　根岸　愛子
明治学院大学教授　神保　信一
早稲田大学教授　川原　栄峰
横浜国立大学助教授　市川　博
東京都立大学助教授　稲垣　寛
特許法研究会　福田　秀幸
ゼノア(管理者教育)
大学連合後藤ゼミナール
東京都立大学教授　唄　孝一
滝野川教会　大木　英夫
法政大学助教授　麻生　宗由
東京都立大学助教授　小野　茂
和光大学講師　小川　利夫
東京都立大学教授　小畠　守生
東京大学教授　木村　彰一
津田塾大学教授　藤井　正雄
立教大学教授　牛窪　浩
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
日野自動車販売　真野　喜興
東京大学教授　北垣　信行
スリーボンド(女子社員研修)
多摩三菱ふそう自動車販売(研修)
日本山岳協会
東京都立大学助教授　水谷　三公
玉川大学教授　若槻　泰雄
ヤシカ(管理者研修)
日本女子大学助教授　荒井　基
日野自動車販売
(セールスマン教育)
明星大学講師　安井　将文
東京大学五月祭委員会
慶応義塾大学教授　林　喜男
ボーイスカウト東京連盟
東京学芸大学講師　福富　護
一橋大学講師　西田　美昭
職業訓練大学校ユネスコ研究会
東京大学助教授　木村尚三郎
西武建設(社員研修)
クリスチャンAVセンター
東京都立大学助教授　水沼　知一
東芝住宅産業(新人営業研修)

東京都立大学助教授　鴇田　忠彦
一橋大学助教授　松田　芳郎
国際ナビゲーター

◈2月

明治学院大学グリークラブ
玉川大学助教授　彦由　一太
多摩中央信用金庫（研修）
青山学院大学講師　笹森　健
野村総合研究所
早稲田大学生産研究所
明治大学助教授　牧野　誠一
日野自動車販売　真野　喜興
青山学院大学教授　羽田　三郎
第65回大学共同セミナー
日本女子大学助教授　荒井　基
スリーボンド（研修）
日野自動車協力会（部課長研修）
東京学芸大学教授　大嶋　三男
目白学園女子短期大学助教授　中山　昌
小西六写真工業産業研修
東京大学教授　大田　堯
明治学院大学第三回総合セミナー
法政大学教授　西川大二郎
松本亨英語教育研究会
日本キリスト教団福生教会
東京経済大学助教授　依田　精一
三協能率（研修）
中央大学教授　稲生典太郎
駒沢大学助教授　阿部　肇一
富士電機
明治学院大学講師　吉野　一
日本化学会
東京都立大学教授　小林　靖二
東京都立大学講師　安川　浩
明治大学講師　大給　近達
ヤシカ（管理者研修）
中央大学助教授　田中　拓男
東京経済大学助教授　末岡　俊二
明治学院大学講師　吉原　功
目白学院女子短期大学教授　片山　清一
慶応義塾大学　関口　武
明治学院大学教授　佐藤　和男
宮城教育大学教授　井手　則雄
英語教育振興会
法政大学助教授　飯田　泰三
東京女子大学茶道研究会
成蹊大学教授　宇野　重昭
慶応義塾大学教授　千種　義人
東京工業大学教授　真壁　肇
東洋大学教授　藤木三千人
立教大学助教授　小谷　幸男
ADO本部通信教育スクーリング
上智大学講師　小田中聰樹
東京都立大学教授　山崎　康男
東京都立大学教授　城座　和夫
東京都立大学教授　石村　善助
東京経済大学ユネスコ研究会
日本電気（企業内研修）
日本国際生活体験協会
中央大学教授　石原　忠男
東京経済大学教授　井野　隆一
立教大学助教授　大橋　泰二
東京都立大学助教授　遠藤　慶三
日野自動車工業
法政大学英語連盟
国学院大学史蹟踏歩会
日本機械学会
中央大学助教授　長田　光展
日本自然保護協会
法政大学講師　有賀　弘
早稲田大学教授　新沢　雄一
東京都立大学助教授　鴇田　忠彦
法政大学経済学研究会
フジタ工業（研修）
中央大学教授　服部　正夫
日本大学助教授　榛沢　芳雄
東京理科大学教授　鈴木　良治
慶応義塾大学講師　倉林　武
富士電機　金森　正
中央大学　高窪　利一
慶応義塾大学助手　小沢　慎治
日本キリスト教会神学校
東洋大学教授　モーゼス・バーグ
太田製薬　福本　光照
京王プラザホテル　高橋　清光
東京大学助教授　芳賀　徹
一橋大学教授　西　順蔵
東京学芸大学　鈴木日出男
法政大学講師　土方　保
青山学院大学講師　寺東　寛治
早稲田大学教授　岩瀬　孝
大阪府立大学助手　青木　豊明
野猿峠自治会

◈3月

東京大学助手　小泉　秀夫
法政大学講師　古沢　常雄
日電バリアン研修　加瀬　寧
明治学院大学　吉原　功
東洋大学講師　丸山　稔
横浜国立大学助教授　市川　博
武蔵工業大学助教授　桑原　哲郎
東京大学助教授　公文　俊平
東京大学助教授　見田　宗介
市光工業（研修）　須賀　進
一橋大学教授　杉原　泰雄
明治学院大学助教授　橋本　茂
慶応義塾大学　土田　俊一
総合経営能率協会
学習院大学助手　名取　晃子
AFS日本協会
東京郵政局人事部訓練課
東京学芸大学助教授　山崎　謙介
ヤシカ（管理者研修）　原田　靖彦
国際ナビゲーター　神保　信一
明治学院大学教授　吉谷　竜一
早稲田大学教授　狩野　紀照
電気通信大学講師　山田耕之介
立教大学教授　安江　孝司
法政大学助教授　黒田登志雄
学習院大学助手　武　基雄
早稲田大学教授　橋口　英俊
東京家政大学
第66回学大共同セミナー　栗原　彬
立教大学助教授

March 20, 1974

Dear Daigaku Seminar House Staff:

Since I was also at the House three years ago as an EIL student my expectations about returning were quite favourable. In our EIL program planning last fall I specifically requested the language study to be at the Seminar House.

Upon arrival the architecture style of the facility is quite unusual. With time I began to appreciate it more and even find it fascinating.

Since the purpose of our visit was to learn some Japanese, the pastoral atmosphere of the House is quite suitable. I really enjoy the quiet and peace. The House also provided us an opportunity to meet Japanese students and to exchange ideas. The House is a good meeting place.

The food this year was very good. We especially enjoyed the special farewell dinner that was prepared by the Kitchen staff. We want to give our special thanks to the Kitchen staff for their help and patience.

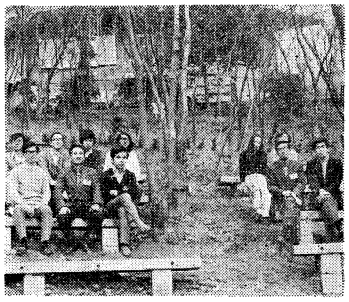
To conclude, our visit to the House was very enjoyable. We would like to give our sincerest thanks to everyone for all of their efforts to make our visit so successful. I hope that other foreigners will continue to have the opportunity to stay at the Seminar House.

I hope to see you again.

Patrick Dowdle

Patrick Dowdle, Academic Director
Independent Study Program of Japan
Experiment in International Living

武蔵大学教授　久山　満夫
東京高島屋労組　西浜　剛久
慶応義塾女子高校　岡田　忠彦
東京大学哲学研究会
日本大学教授　中島　邦男
東京スクールオブビジネス　北村　秀一
早稲田大学助教授　中村　末喜
中央大学助教授　村山　元英
早稲田大学教授　池原　義郎
松本亨英語教育研究会　斎藤　丈一
東京都立大学教授　鈴木　二郎
横河ヒューレットパッカード　柿島　義孝
東京都立大学教授　内田　道夫
専修大学教授　望月　清司
昭和海運　土方　雅彦
東京大学助教授　菊池　昌典
津田塾大学教授　藤村　瞬一
青山学院大学教授　山田　欽一
法政大学教授　古川　哲
成蹊大学教授　広野　良吉
明治大学教授　藪本　忠一
明治学院大学教授　森井　真
滝野川教会青年部　棚村　重行
堀の内キリスト教会　赤羽　章
早稲田大学教授　島越　信
東京大学教授　大田　堯
東京大学助教授　有馬　朗人


セミナーの合間に野外ステージベンチで一息

東京大学教授　山口　俊夫
国際学生技術研修協会　小泉　裕
中央大学教授　横井　芳松
日本WFA　山下　晶
芙蓉情報センター科学計算部　山辺　功二
東京大学教授　木村　彰一
東京YMCA　浦田　信子
東京工業大学教授　松田　武彦
早稲田大学講師　檜田　信男
明治学院大学教授　都留　信夫
日本女子大学教授　徳末　愛子
専修大学教授　山本　満
亜細亜大学講師　竹中　直文
新生活運動協会　大沢暢太郎
明治学院大学英文タイプ部
慶応義塾大学教授　西川　俊作
専修大学助教授　土方　保

東洋大学教授　田中　陽児
中央大学助教授　矢部　浩祥
数学教育実践研究会　町田彰一郎
早稲田大学講師　中根甚一郎
立教大学教授　安藤　瑞夫
横浜国立大学助教授　伊藤　忠彦
文学教育研究者集団　熊谷　孝
東京理科大学教授　大沢綱一郎
AFS日本協会　加藤紀美江
法政大学地理学研究会
京都府文化事業室
成蹊大学教授　木村　充男
英語教育協議会　松下　幸夫
松下電器産業　瀬下巳千之助
東京医科歯科大学
ソビエト医学研究会
横浜国立大学助手　秋葉　繁夫
学習院大学藥々会
明治学院大学助教授　新田　孝二
法政大学教授　今井　則義
学習院大学放送研究部
東京立石電機　疋田　邦男
創価大学教授　若江　正三

◆個人利用

野村総合研究所　山田　善靖
早稲田大学学生　橋本　能
大阪府立大学助手　青木　豊明
玉川大学教授　若槻　泰雄
地域計画建築研究所　北条　誠
東京立石電機社員　内海　淳
青山学院大学助教授　岸　英朗
新潟大学学生　松本　陽一
明治学院大学教授　佐藤　和男
成蹊大学教授　佐藤　庸

大学共同セミナー開催予告

■第69回　トインビーと現代（新入生歓迎セミナー）　6月21～23日

■第70回　芸術のたのしみ—演劇・美術・音楽における伝統と現代—　7月18～21日

●専務理事ノート

前理事長加藤六美先生は多趣味な人です。三越で個展を開かれる程の陶芸家ですから、先生にお目にかかることは私にとって大変楽しいことでした。趣味を生活する学者ですから一言一動が人生の指針になり、先生との出会いは私にとってまたセミナー・ハウスにとっても幸わせでした。

利用者がどんなふうにセミナー・ハウスを批評されようと止むを得ないことですが、できるなら褒めてもらいたいのが人情です。東京新聞3月29日の夕刊の「放射線」で専修大学の山本満教授が「多摩丘陵の春」という愛情あふれる文章を書いてくれました。内容と目的を的確にとらえた達意の文章です。茅誠司先生の奥様からもご感想のはがきをいただきました。どなたでもこれを読まれたら「ゼミの勉強は八王子のセミナー・ハウス」ということになりましょう。

ついで読売新聞4月16日夕刊の「東風西風」には都立大学の半谷高久教授が「多摩自由大学」としてセミナー・ハウスの活動を評価し、その役割に期待してくれました。閉鎖的な日本の大学社会の中で、セミナー・ハウスが自由大学として成長することを祈って下さるのは半谷先生ばかりではないと思います。大いなる激励のことばでした。共同セミナーの運命を諸先生の協力によって負わねばなりません。

何が起きるか、何がどうなっているのか、現代の実相と展望をきわめることは本当に困難なことです。突如として昨年末には石油危機に襲われ、冬の暖房には職員一同お客さまの接待に心をくだきました。ついで4月半ばには交通ストで各大学が例年この時期に新入生のために行うオリエンテーションが全部キャンセルになりました。これは大損害でした。

激動の時代を生き抜くためにとか危機克服の道とかいって総合雑誌の編集にはテーマにこと欠かない時代ですが、人件費、物件費が高くなるばかりで、小さな事業ですがセミナー・ハウスも時代の波をかぶって経営に苦労しています。

私にとって、近来にない衝撃だったのは、島田療育園の小林提樹園長が「疲れ果てた」といって4月15日辞任されたことでした。昭和36年、われわれの向こうの丘で重症心身障害児のためにこの施設をつくったのです。この方面では先駆者的役割を果たされた貴重な施設です。理想と現実のざ折にどんなにか苦悩されたことでしょう。私にもそれがよくわかります。

昨冬落成した野外ステージが若葉、青葉のシーズンを迎えて、たのしいプログラムで利用して下さるように待っています。